

ドナーの条件



英遠 岡崎

「精子をボランティアで提供してくれたら50000円(約10万円)差し上げます」。北京の「精子バンク」が今年2月、大学生に対して、このような呼びかけをして話題となった。

中国では出生率の低下に歯止めがかからず、昨年、61年ぶりに人口が減少に転じた。中国政府は出産奨励にかじを切り、さまざまな少子化対策を打ち出している。今回の呼びかけは、その一つである不妊治療支援の一環だ。

中国メディアによると、中国国内の夫婦の不妊率は北京市や天津市など一部の地域で15%に達し、その40%は男性の精子が原因とされる。精子提供に対する需要は高まる一方で提供者(ドナー)は不足しており、全国28カ所の精子バンクがそれぞれ最大40000(75000元(約8万~15万円)の奨励金を設定して提供者を募っている状況だという。

その奨励金と共に注目されたのが提供者になるための条件だ。国家衛生健康委科学技術研究所が運営す

る北京市の精子バンクが提示する条件では、身長170^{センチ}以上▽年齢20~40歳▽大学生または大卒以上の学歴▽重度の近視ではない▽色盲、色弱などの色覚異常がないなど事細かに規定される。

さらに全国の精子バンクを調べてみると、頭がはげていない(広西チワン族自治区)▽吃音症^{きつおん}でない(山西省)▽入れ墨がない(広東省)▽顔立ちが整っている(安徽省)▽漢族である(江蘇省)といったものである。

中国がこれまで人口政策として掲げてきた「優生優育(より健康に生み、より健康に育てる)」の思想が色濃く反映された形とも言えそうだが、いずれにせよ日本人にはなかなか衝撃的な基準だ。

実際にドナーとなりうる中国の若者はどのように考えるのか。

北京市内の名門大学に通う男子大学院生(24)に聞いてみた。大学院生は、院生仲間の中で精子バンクの話が話題になったことを明かしたうえで「実際にドナーになるとすべて終了するまで数カ月必要です。そう考えると費用対効果はさほど良くない。多くの大学生が参加するとは思えません」。精子バンクは損得勘定からあまり魅力的ではないようだ。